

## 問答法、試問術とソクラテス

—アリストテレス『ソフィスト的論駁について』 34.183a37–b8—

## 納富信留

アリストテレスの「オルガノン」(論理学著作)の最後に位置する『ソフィスト的論駁について』(Περὶ τῶν σοφιστικῶν ἐλέγχων、以下 SE と略)は、その最終章で『トポス論』(Τοπικά、以下 Top. と略)と当著作両方への結語を付している。その一節では、プラトン以来の「ディアレクティケー」(διαλεκτική、ここでは「問答法」と訳す)と、ソクラテスを連想させる「試問術」(πειραστική)、「ソフィスト術」(σοφιστική)の3者の関係が語られる。オルガノン中でソクラテスの哲学に触れた唯一の箇所であり、アリストテレスが先行者とどう関わっていたかを考える上でもきわめて重要である。他方で、そのテキストには、現在定番となっている Ross 校訂の OCT 版で二つの改訂が為されており、内容の解釈には困難がある。本小論では、その一節を検討しながら、アリストテレス「問答法」の意味を明らかにしていきたい。

## テキスト：第 34 章 183a37–b8

(行数と写本情報は Ross の OCT 版による)

- 183a37 [A] Προειλόμεθα μὲν οὖν εὐρεῖν δύναμιν τινα συλλογιστικὴν περὶ τοῦ προβληθέντος ἐκ τῶν ὑπαρχόντων ὡς ἐνδοξοτάτων· τοῦτο γὰρ ἔργον ἐστὶ τῆς διαλεκτικῆς καθ' αὐτὴν καὶ τῆς
- 183b1 πειραστικῆς. [B] ἐπεὶ δὲ προσκατασκευάζεται πρὸς αὐτὴν διὰ τὴν τῆς σοφιστικῆς γειννίασιν, ὡς οὐ μόνον πείραν δύναται λαβεῖν διαλεκτικῶς ἀλλὰ καὶ ὡς εἰδῶς, διὰ τοῦτο οὐ μόνον τὸ λεχθὲν ἔργον ὑπεθέμεθα τῆς πραγματείας, τὸ λόγον
- b5 δύνασθαι λαβεῖν, ἀλλὰ καὶ ὅπως λόγον ὑπέχοντες φυλάξομεν τὴν θέσιν ὡς δι' ἐνδοξοτάτων ὁμοτρόπως. [C] τὴν δ' αἰτίαν εἰρήκαμεν τούτου, ἐπεὶ καὶ διὰ τοῦτο Σωκράτης ἡρώτα ἀλλ' οὐκ ἀπεκρίνετο· ὡμολόγει γὰρ οὐκ εἰδέναι.

**b1** προσκατασκευάζεται BDCM<sup>c</sup> Waitz, Poste, Strache-Wallies, Barnes, Dorion, Fait: προσκατασκευαστέον Ross **b2** ὡς ... πείραν δύναται (δύναται πείραν u) codd. Waitz, Poste, Strache-Wallies, Barnes, Fait: ὡστ' ... δύνασθαι Δ Ross **b3** καὶ (δοῦναι or ὑπέχειν) Grote, Dorion

## [拙訳]

[A] われわれは、提出された問題について、一般にもっともそう思われることとして前提された命題から、なんらかの推論を成す能力を見出すことを目標とした。これが、問答法そのもの、および、試問術の仕事だからである。[B] 他方で、問答法は、ソフィスト術との隣接性ゆえに、問答法的に試問することができるだけでなく、当の事物を知っている者としてそれができるように、推論能力そのものに加えて備えがなされている。このことゆえ、われわれは語られた仕事、すなわち、問い手として答え手に言論を認めさせる能力だけでなく、自分が答え手となって言論を引き受けた時に、提題を同じ仕方で、一般にもっともそう思われる前提命題から推論されたものとして守ることを、この論考の主題としたのである。[C] その理由をわれわれは語ったが、このことゆえに、ソクラテスは問いかけただけで答えを与えなかったのである。彼は「知らない」と同意していたからである。

## 議論の構造

まず、本テキストの議論構造を確認しておく。全体は大きく 3 文からなり、*Top.* と *SE* の課題を、[A] 推論を成す能力と、[B] 答えにおける防御の能力という 2 点にまとめ、[B] を加える理由を [C] で説明している。[B] で  $b_{1-3}$  の  $\epsilon\pi\epsilon\acute{\iota}$  の従属節は、 $\delta\acute{\iota}\alpha\ \tau\omicron\upsilon\tau\omicron$  で受けられ、 $b_{3-6}$  の主文に理由を与えている。

## 検討 I : Ross の改定案

主な問題は下線部  $b_{1-3}$  の読みと解釈にある。 $\epsilon\pi\epsilon\acute{\iota}$  節の主動詞は、主要写本では  $\pi\rho\omicron\sigma\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\zeta\epsilon\tau\alpha\iota$  であるが、Ross は  $\pi\rho\omicron\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\sigma\tau\acute{\epsilon}\omicron\nu$  という独自の読みを提案し、おそらくそれとの連動で、 $b_{2-3}$  の  $\acute{\omega}\varsigma$  + 主動詞を  $\acute{\omega}\sigma\tau'$  + 不定詞の構文に変えている。

前者について写本上の根拠は、Waitz が報告する u 写本 (Basileensis 54、12 世紀) の読み  $\pi\rho\omicron\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\zeta\epsilon\tau\alpha\iota$  にあるが、動形容詞形は Ross 自身の改訂である。また、ソフォニアス (S) 著と推測される無名氏注解も異読情報で参照されている。確かに、Hayduck が校訂した *CAG* (66.33) では  $\pi\rho\omicron\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\zeta\epsilon\tau\alpha\iota$  となっているが、その異読情報では、この読みをとる LM 写本と、アリストテレス主要写本と同じ  $\pi\rho\omicron\sigma\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\zeta\epsilon\tau\alpha\iota$  を読む N 写本に分かれている。 $\pi\rho\omicron\sigma\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\zeta\epsilon\omega$  という動詞は、アリストテレス著作集では *Top.* III.2, 118a13 で一カ所だけ用例があるが (以下で検討)、 $\pi\rho\omicron\kappa\alpha\tau\alpha\sigma\kappa\epsilon\upsilon\acute{\alpha}\zeta\epsilon\omega$  には用例がない。 $\tau\acute{\epsilon}\omicron\nu$  という動形容詞にすると「備えを有していなければならない」(Ross テキストで読む宮内訳) という当為になる。

これは *ὡστε* への読み変えにも関わる。この改訂の根拠はボエティウスのラテン語訳 (A) に求められているが、そこでは *ut ... possit ...* となっており (グウイレルムのラテン語も同様)、元のギリシア語が異なっていたと想定する必要はない (cf. Dod)。Pacius の希羅対訳では主要写本の読みの通りで同様のラテン語訳を付している。改訂の根拠は、むしろ次節以下で検討する構文と内容の理解にあると思われる。

書き誤りが生じやすい接頭辞の綴りではあるが (e.g. Pl. *Soph.* 241a6)、主要写本の読みを改訂する文献学上の根拠は薄弱である。Ross が依拠した u 写本やソフォニアスは 12–14 世紀であり、より古い正しい読みを保持していると考えより、この時期に異読が生じたとする方が自然だからである。Ross 以前に改訂は為されておらず、Bekker, Strache–Wallies (Teubner 版)、Waitz らは写本通りに読んでいた。また、Dorion, Fait ら近年の注釈者も Ross の改訂を批判して写本の読みに戻している。概して Ross の OCT 版は、写本の扱いという点では優れた校訂版であるが (cf. Grimaldi)、独自の読みにはしばしば勇み足が見られる。この点はとりわけ Dorion が各箇所でも批判的にコメントしている。

## 検討 2 : b1–3 の構文

写本通り 3 人称単数現在形の *προσκατασκευάζεται* と読む場合、中動態か受動態かの構文、及び、その意味を確定しなければならない。

Fait (220–221) は、中動態で配慮の動詞 (*verbum curandi*) にすると *ὡς* 節を取らないため、受動態で主張の動詞 (*verbum dicendi*) と読む提案をし、*si pretende ... che* 「～と主張、要求される」と訳している。その場合、*πρὸς αὐτήν* は「問答法との関係で」といった意味になる (だが、多くの訳者はこの句を明瞭に訳出していない)。Dorion は *on attend de plus ... qu'* 「人が～すると期待する」と訳し、Tricot の *on demande en outre ... d'* も一般的な 3 人称で実際には受動態で読んでいるのであろう。Forster の *there is further added to it ... that* も同様の構文理解と思われる。

接頭辞のない *κατασκευάζειν* は、*Top.* では「命題を確立する、議論を構築する」という意味で頻出する術語で 106 ほど用例があるが、そのすべてが能動態である。他方で、接頭辞 *προσ-* を伴う動詞の用例は、本箇所を除くと、アリストテレス著作集中で *Top.* III.2 に 1 例あるのみで、そこでは中動態が用いられている。そこでこの動詞は、問答法における主張や要求ではなく、一般的な意味を担う。

余剰とは、必要なものが現にあって、人が他のなにか立派なものを加えて確保・備えようとする場合に (*ἄλλα τινὰ προσκατασκευάζεται τις τῶν καλῶν*) あるものであ

る。(III.2, 118a12-13)

*κατασκευάζειν* は本来の「設える、備える、構築する」といった意味からアリストテレスが問答法に転用した術語であり、一般的に「主張、要求する」という意味で使われる動詞ではない。また、*Top.* と *SE* でこの動詞が通常、中受動態で用いられない事実は、Dorion や Fait らの「主張、期待される」という訳に強い疑問を投げかける。加えて、*προσ-* の合成形は稀であって、III.2 の用例と同様の意味ではないかと推測される。他方で、もし受動態であるとする、非人称主語で「備わる」を意味するのであろうが、その場合には「～に」という与格を伴うのが通常である。従って、ここでは中動態に解釈するのが最適と考える。

他方で、この解釈では、Ross が危惧して改訂し、Fait の解釈の根拠となった *ὡς* 節の接続に疑問の余地がないとは言えない。だが、*ὡς* 節は、中動態の構文で備えの対象として「～ということ（備える）」という目的語に読むか、あるいは、能力の内容を表す目的・結果節に取ることが可能であろう。

*προσκατασκευάζεται* が中動態で「自身のために加えて備える」を意味する場合、その主語は「問答法」であろう。その場合、*πρὸς αὐτήν* は動詞の接頭辞と呼応する「それに加えて」の意味であろう。「それ」が指す女性名詞は直前にある「試問術」か「推論の能力」かのいずれかである。無名氏注解 66.34 は「試問術」を主格で *αὐτήν* の後に記しているが (gloss?)、試問術は問答法の一部と見なされており付加の対象になり得ないことから、a37 の *δύναμιν τινα συλλογιστικὴν* を受けると解するのが適当である (Chiba)。

以上から、「問答法は、推論能力そのものに加えて、～という備えがなされている」という中動態の構文理解が適当であろう。

### 検討 3 : b1-3 の内容

問答法とソフィスト術の隣接関係は、b1-2 で *διὰ τὴν τῆς σοφιστικῆς γειννίασιν* と語られるが、それは第 11 章の「問答法：ソフィスト術＝幾何学：偽図形」の関係にあたる。その隣接関係が、問答法が推論能力だけでなく、それに加えて知者としての試問の能力を持つことの根拠とされる。推論能力は主に分析論で扱われる学的知識において用いられるが、そこでは相手の吟味という要素は不要であった。他方で、問答という場面をソフィスト術と共有する問答法は、問い手が知の立場から答え手の「知／不知」を吟味し、答え手は知を伴いながら自身の立場を擁護する能力を有するのである。ここで b3 *ὡς εἰδώς* の分詞が男性形であることにも注意しよう。この文章の主語は本来「問答法」(女性)である

が、それを運用する「人」に代わっているのである。

この箇所について Dorion (407–410) は、没後に公刊された Grote (vol. II, 129–130) のアリストテレス研究書の解釈を復活させ、問答法はやむを得ない状況でソフィスト術との関係に巻き込まれるだけであり、本来はソクラテスのように問いかける営みだけに従事すればそれがよかった、と解する。つまり、答え手の役割や手法の解明は、ソフィストの議論に巻き込まれるがゆえに問答法に期待される偶然的な要素だと看做す。Grote は、試問を行うのは問い手の役割であり、答え手は「知っている者として答えを与える」という役割の分担があると説明していた。そこで *ὡς εἰδώς* は *πεῖραν δύναται* にかかるのではなく、*δοῦναι* か *ὑπέχων* の語の欠落を補うべきだと提案している。その場合「知っている者として」とは、試問を受ける者の「知った振りをする」という特徴として理解される。Dorion はこの解釈を受け継ぎ、b2–3 と b3–5 の二度の *οὐ μόνον ... ἀλλὰ καί* が正確な対応をなし、それぞれ「問い手／答え手」の役割を対比させているという構文理解をその解釈の論拠にしている。

Fait (220–221) は Grote–Dorion に反対し、*ὡς εἰδώς* をテキスト通り問い手の営みにかける (Poste や Chiba も同様)。Grote らのように、アリストテレスが非常に不注意な言い方をした、あるいは、テキスト上に欠落があるといった想定をすることは、特定の解釈が要請する無理な処理であり、あくまで問い手が試問するやり方を規定する文意に解すべきである。

この論点は、b6–7 「その理由をわれわれは語った」という言及がどこを指すかをめぐる解釈の対立に連動している。Pacius, Waitz 以来多くの論者は第 I 章 165a24–31 を指すものと理解しており、論者もそれに合意する。Dorion (410–411) はそれに反対し、第 17 章を指すと解釈している。だが、「見かけの解決法」を論じる第 17 章が SE の主題への理由を示していたとは考えられない。Chiba は *Top. I.14* を指すと提案するが、命題確保を問答法的手段として提示するその章は、関係はあるにしても直接の参照箇所ではなかろう。

SE 第 I 章の箇所で「知っている」とは、ソフィストが「知者の見かけを作る」こととの対比で、問答家を特徴づける表現であった。問答家は問いと答えのやり取りを、推論をつうじて遂行する限りで哲学的な知を獲得し、「知っている振りをしているが、実際には知がない」ソフィストと、その点で異なるのである。

知を持つ者の仕事を (*ἔργον τοῦ εἰδότος*)、各々の事柄について一対の対比で語ると、答え手は自らが知っていることに関して虚偽を語らないこと、問い手は虚偽を言っている人を明示できることである。前者は、言論を与える答え手の能力のうちであり、後者は、言論を受け取る問い手の能力のうちにある。(I.165a24–28)

b6-7の言及がこの箇所に向けられているとすると、「知っている者として」は、あくまで問答法が備えるべき積極的な能力の表現となる。多くの注釈者は with a pretence of knowledge (Forster)、with a show of knowledge (Pickard-Cambridge)、de paraître connaître la chose en discussion (Tricot) と訳し、試問術が向けられる相手の「知の見かけ、振り」を指すと見なしている。だが、本当は知らないにもかかわらず「知っている者として」振る舞うという意味で  $\omega\varsigma$   $\epsilon\iota\delta\omega\varsigma$  を取る解釈は、第 I 章 165a24-28 の記述にはそぐわない。

## 検討 4：ソクラテスとの対比

「試問術」は、知っているように振る舞う相手に対して問いかけ、その知を吟味する議論法であり (2.165b4-7)、相手の知が見かけに過ぎない場合、その人が「不知である」  $\alpha\gamma\nu\sigma\upsilon\nu\tau\alpha\varsigma$  と開示することができる (8.169b23-27)。アリストテレスは、この試問術を問答法の一部と見なしている (8.169b25, II.171b4-5)。問答家は、ソフィストが知を持たずに議論するのは異なり、推論を遂行する能力を有するがゆえに知を有する。また、問答法においては、答え手もその知を持ちながら、できるだけ自己の提題 (テシス) を防衛しようとする (I.165a24-31)。

では、ソクラテスへの言及はどう解釈されるか。ソクラテスが対話において問いかける役割に従事し、答え手にならなかったことは、プラトン対話篇から一般に受けるイメージである。実際には、ソクラテスもしばしば応答の役割を果たしているが、『ポリテイア』第 I 巻 337A-338B ではトラシユマコスが、ソクラテスがいつも質問ばかりで自分の考えを言わない「空とぼけ」を非難している。クセノフォン『ソクラテスの思い出』第 4 巻 4.9 ではヒッピアスが同様の批判をソクラテスにぶつけているが、このコメントはプラトン対話篇を意識した間テクスト的言及とも解釈されている。「ソクラテスは問いかけるだけで答えを与えなかったのである」(183b7-8) とは、この一般状況を反映したコメントである。ソクラテスが対話問答に従事したのは、『ソクラテスの弁明』20D-23C で語られる「アポロン神託事件」が象徴的に示すように、自身に知がないという自覚のもとで、自他ともに知者であると思われる人々を吟味して、本当に知があるかどうかを試すためであった。結果としてその吟味は、相手が「不知」であることを暴くことになった。それは、アリストテレスの「試問術」と重なる。

試問術が相手の知を吟味する際、「適切に答えを与えることができれば、その人は知がある」が成立する。その対偶は、「知がなければ、適切な答えを与えることができない」となるが、これはソクラテスが露呈した事態である。ソクラテス自身は「知らない」と同意していた以上、答え手になって特定の命題を守ることはできず、それゆえこの同意が「問

いかけるだけで答えを与えなかった」(183b7-8) ことの原因になるのである。

ソクラテスは相手に問いかけを行い、論駁してその不知を暴くにあたって、自身がその事柄を知っている必要はないと考え、むしろ自身の不知を認め、それを出発点に相手と議論していた。しかし、同様に相手を論駁するようになるソフィストの議論は、ソクラテスとは異なり、必ずしも相手の「不知」を示すものではない。というのは、ソフィストはうまく誤謬を用いることで、知っている者をも混乱させて彼らが論駁されたかのような見かけを作るからである(8.169b27-29)。相手の知を試す問いかけの議論は、推論の能力と知を伴わないと、きちんと「不知」を示すことができないはずなのである。これが、本来ソクラテスをソフィストから分ける要点であった。

アリストテレスの「試問術」は、それが問答法の一部である限りで、問い手と答え手に推論の知を伴った正しい議論を遂行させる。183b1-3 で確認されたように、問い手も「知っている者として」試問を行う備えがある。この点では、ソクラテスによる吟味はアリストテレスが「問いと答え」で成り立つとした問答法の半面というより、問いかけとしても不十分であると見なされるかもしれない。だが、ソクラテスの議論は、正しい推論をつうじて事柄を探究する限りでアリストテレスの問答家の規定に適うように見える。他方、プラトンは『ポリテイア』第6-7巻で「ディアレクティケー」を、問答の言論をつうじてアイデアを認識する「知」の段階と規定する。この規定はまだ素描に留まっているが、アリストテレスは *Top.*, *SE* でそのプログラムを完成させたと言えるのではないか。

こうしてアリストテレスは、ソクラテスやプラトンの問答を受け継ぎそれを越える自身の「問答法」を、ソクラテスとの対比で提示するとともに、ソクラテス的な不知の開示がソフィスト的な論駁と袂を分かち条件を明瞭に示したのである。

(慶應義塾大学)

## 参考文献

- Anonymus. 1883. *In Aristotelis Sophisticos Elenchos Paraphrasis*, ed. M. Hayduck, CAG XXIII.4. Berlin. (無名氏注解)
- Bekker, I. 1831. *Aristotelis Opera*, vol. I. Berlin.
- Chiba, K. forthcoming. 'Aristotle's *logikos* formation of dialectic in his intellectual system'.
- Dod, B. G. 1975. *Aristoteles Latinus VI 1-3, De Sophisticis Elenchis* (translatio Boethii, fragmenta translationis Iacobi et recensio Guillelmi de Moerbeke). Leiden / Bruxelles.
- Dorion, L.-A. 1995. *Aristote, Les Réfutations Sophistiques*. Paris.
- Fait, P. 2007. *Aristotele, Le Confutazioni Sofistiche* (Organon VI). Bari.

- Forster, E. S. 1955. *Aristotle, On Sophistical Refutations* (Loeb Classical Library). London / Cambridge, Mass.
- Grimaldi, W. M. A. 1960. 'Review: W. D. Ross. *Aristotelis Topica et Sophistici Elenchi*', *American Journal of Philology* 81, 315-322.
- Grote, G. 1872. *Aristotle*, 2 vols. ed. by A. Bain & G. C. Robertson, London.
- 宮内璋 1970. 『詭弁論駁論』「アリストテレス全集 2」、岩波書店。
- 納富信留 2014 [近刊]. 『ソフィスト的論駁について』「アリストテレス全集 3」、岩波書店。
- Pacius, J. 1597. *Aristotelis Peripateticorum Principis Organum*, Frankfurt am Main (repr. Hildesheim, 1967).
- Pickard-Cambridge, W. A., Barnes, J. revised, 1984. *Aristotle, Sophistical Refutations* (The Complete Works of Aristotle, the revised Oxford translation, vol. 1). Princeton.
- Poste, E. 1866. *Aristotle On Fallacies, or The Sophistici Elenchi*. London.
- Rolfes, E. 1922. *Aristoteles, Sophistische Widerlegungen (Organon VI)*, 2te Aufl. Hamburg.
- Ross, W. D. 1958. *Aristotelis Topica et Sophistici Elenchi* (Oxford Classical Texts). Oxford.
- Strache, I. & Wallies, M. 1923. *Aristotelis Topica cum Libro de Sophisticis Elenchis*. Leipzig.
- Tricot, J. 1939. *Aristote, Organon VI. Les Réfutations Sophistiques*. Paris.
- Waitz, Th. 1846. *Aristoteles, Organon Graece, pars posterior, Topica*. Leipzig.

[本小論は、岩波書店から刊行中の新しい「アリストテレス全集」第3巻所収の『ソフィスト的論駁について』翻訳にあたって、文献学的注記が必要と思われた箇所の検討である。この一節の重要性は、北海道大学の千葉恵氏から示唆を受けた。ソクラテスの論理を強めることでアリストテレス哲学が成立したという千葉氏の論に、大いに啓発された。また、テキスト解釈の詳細について、査読者より貴重な示唆をいただいた。ここに感謝申し上げたい。ただし、解釈の最終責任は著者にある。]